

ティーチング・ステートメント

所属 商学科

名前 遠谷貴裕

作成日 2020年2月22日

【責任】

商学科において会計専門とした教育・研究活動を行っている。会計教育において、ただ簿記を機械的に説くのではなく、なぜそのような仕訳をしなくてはならないのかを考えられるように教育をしていく。具体的には会計学では、会計の仕訳の意味（基準公準）を理解できるように、財務諸表論では単にその意味だけではなく、どのように用いて分析を行うのか、その分析の意味について教えられるようにする。また、ゼミ生の研究就活支援を行う。

【理念】

学生には単に他者が言ったことに迎合するのではなく、主体的に自ら考えられるような人財になってほしい。本学に来る学生の多くは、何か目標があって入ってきたというよりは、なんとなく周りに流され、親に言われるから大学に入学したものが多い。特にそうした学生は夢や目標もなく「どうせ商大だし」というように自分を卑下するものもいる。自分より頭の良い大学の学生に劣等感を持ち、彼らの言うことが正しいと自分の意見を変えるものもいる。こうした背景には今までの人生において主体的に自らの意思で決定してきたことが少ないことも影響しているだろう。

より競争の激しくなっている社会の中で、そのような性格は自身の存在価値を消し、過小評価を相手にさせることになってしまう。なんでも主張することが正しいのではなく、根拠をもって相手と対峙できる人間になり、相手が間違っていると思ったらそれをきちんとと言えるような人間に育ってほしい。そのためには普段から考え、意味を考察する癖をつけることが大切である。

【方針・方法】

上記の理念を達成するために、私のゼミでは2年次よりテキストからレジメを作成し、みんなの前で発表することを行っている。これにより「自ら調べる癖」「質問に答える癖」「多大の学生とあっても物おじしない人間」になれるように教育をしている。

「自ら調べる癖」

- ゼミでは各学生が作成したレジメを読み、担当外の学生に理解させるような形で進めている。その中で専門用語やグラフがでてきたら、私からその意味を聞くようにしている。用語の説明がテキストに書いていないものもあるため、ゼミ前にその内容を調べておかないと説明ができない。そこで各学生はその言葉の意味を調べ、聞かれても答えられるよう教育している。また、グラフなどでは年度によって変化があるのである年を指示しその年に何があったからそのような変化（上がったたり下がったり）があったのかを

説明させている。IT バブルやリーマンショックなど学生が小さいときに起きたイベントについての知識はないので、そうしたことを調べさせることでこういう原因があったから、このような結果が起こったと、原因と結果をリンクできるようにしている。

また、外部のインターンに強制的に参加させることにしている。他大の学生と会い、話すことで、自分の就活に対する意識と相手のギャップを経験させ、就活により真剣に向き合えるようにしている。

「質問に答える癖」

- すべての物事がテキストに載っているわけではないし、派生することについては書いていない。そこで、派生する事例についてディスカッションをし、検討している。例えばリーマンショックとブラックマンデーは何が違うのか、どちらのほうがよりインパクトが大きかったのかなど。

【評価・成果】

ゼミの初期から就活を意識させることにより、東証一部上場企業に多数のゼミ生が合格（前田道路、東計電算など）。

簿記をはじめとした、各種資格の取得

日商簿記 2 級・建設業計理士 2 級・BATIC アカウンティング、マネージャーレベル・FP 二級・証券外務員一種・秘書検定 2 級・日商販売士 2 級・証券アナリスト 1 次試験（経済）

特に、行きたい業界業種に合わせて資格をとることを推奨し、目標業界に対する意識を高めさせた。

【目標】

短期目標：授業におけるクラスルームの利用方法の向上。現在はレジメをアップしたり、問題を出したりしか使っていないので、ほかにどんな利用方法があり、授業に生かせるかを夏までには確立する（2020年7月）。

長期目標：わかりやすい授業を心掛け、資料と説明のリンクをより強化する（2022年4月）